



石城志
九

1001
4



石城志卷之九
人事考上

鳴井 徳永 原
神彦 末次 高原

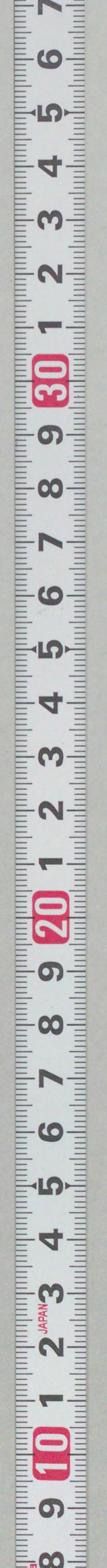
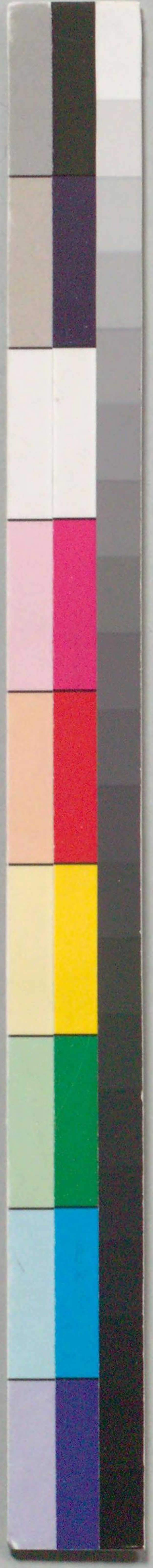
石城志卷之九

人事考上

田文庫

田書藏





石城志卷之九

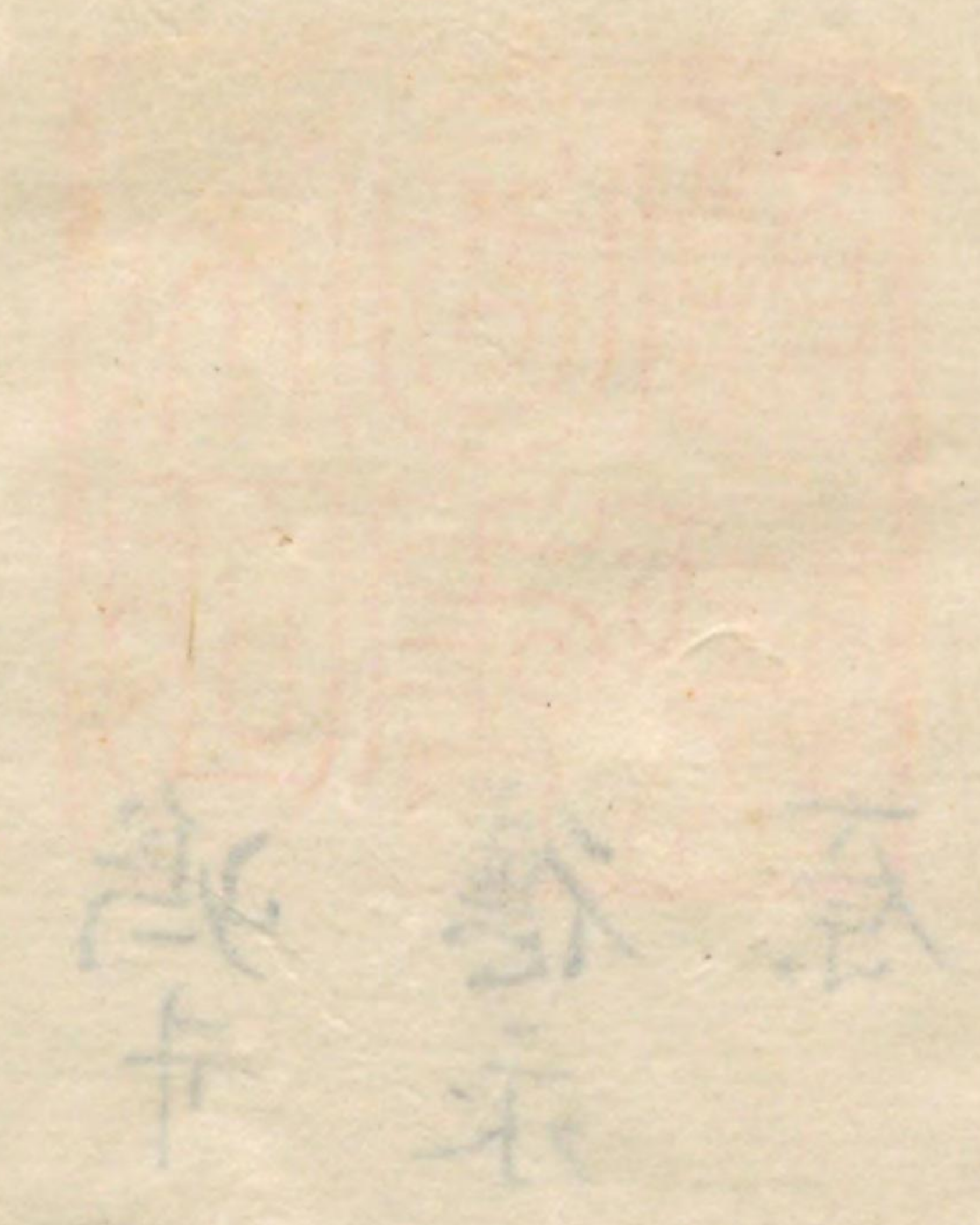
人事上

津田元顧 校定

男 元貫 編録



此巻は石城の諸事の中略に當りて
其の詳は別巻に記すべし
又今
此の巻は石城の諸事の中略に當りて
其の詳は別巻に記すべし
又今



高野
末光
拓吉



かゝるにぬらふに世のゆゑに事後の鑑とてかゝる

小間者一とあり

烏井傳

烏井宗室ハ藤原房前公五十一代修理亮茂教
之の茂教する者右進茂教其の子計女中其
其の子祝女茂教其の子之進茂教且つ子烏井傳
ある其久其子也古又茂教藤原茂教ハ宗室と号
すその次ハ博多本住と号すその子ハ茂教と号す

高ヤ一ハ最推也あり一ハ一ハ豊臣氏秀乃其の西
國下向のハ其の行松原ハ於テ點々茂教ハ又其の
宗室ハ藤原茂教ハ天正十五年博多田原茂教あり一ハ
其の河上ハ其の於テ表ハ十三河井今十河の屋也ハ
太閤より編り永く丁は茂教のまゝ由文福乃次太
閤肥前名復屋一到りのハ一ハ東照源天正其
中其の茂教ハ其のハ其の茂教ハ後年宗室上格也
一ハ其の茂教ハ其のハ一ハ原其のハ其の茂教ハ

ゆりぬ金地紙子孫の事も持参し久しき寛保

之年四月 手紙に記すゆりぬ此三人扶持以下

ゆりぬ又太閤の臣書三通一石田三石の書は洞土通成

野長政と通大友宗麟七八通同義統一通同宗

臣の書は通又宗對馬守義智胤の書は唐門誓

第乃神文あり又本州松本郡海江城主守野中翫右

浦徳永より甲斐又なる書は内三田松吉井村三

田の地分治府より又書あり又宗福より浦一

諸及逸余の書あり且の西苑の事西村守信

へまの文書あり又肥前守三浦浦原守信於宗

室の嫡男徳重の信より又宗の嫡男徳重の書

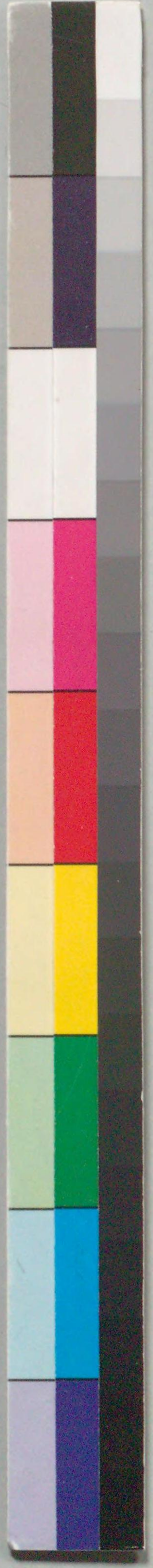
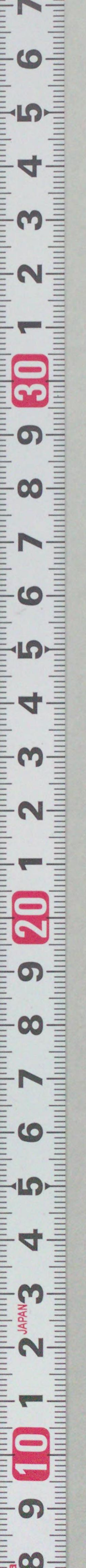
あり且外度人河崎地縁の信文あり

の信より又宗の嫡男徳重の信より又宗の嫡男徳重の書

の信より又宗の嫡男徳重の信より又宗の嫡男徳重の書

の信より又宗の嫡男徳重の信より又宗の嫡男徳重の書

の信より又宗の嫡男徳重の信より又宗の嫡男徳重の書



神屋傳

名鏡曰長祖永与姓菅原氏神屋為東京八幡
宮領成云云云云子計其子書貞此書貞方ぬ
と後り今云のすめ傳文一と序ぬりり詳小出三庄
門小き一と書貞宗所具子紀業其子宗徳
かり宗徳公々々書貞貞清と一と書貞多々一
と長馬有なり一と正徳年中大女毛利の時と云
多々一と今云あり一と兵火のあし序中悉く焦^{ニヤク}と

か一と其後兵の難家避了假小肥前松浦郡唐
津小谷を去り生ぬ酒^{シウ}海^{ウミ}中一と云今云ぬりり
其比云ふ名ぬゆ一と奉人千利休天王寺屋宗及云
小倉一と云教^{ムス}言^{コト}のけ^けり世^セの^ノ^ノ人^{ヒト}と云ひ
三十四年十月亦り唐津の三十月半々云云
とある神々云云云云の傍に今云と一と其改^カま^マ
ハ有^ハ髪^{カツ}なり一と十二月三日紫野天徳寺中住^スり
初尚^{ハツ}云^{コト}一と髪^{カツ}の^ノ名^ナ云^{コト}置^キ宗^ノ徳^ノ政^シ

了す切補入へ出らる此の歎宗屋日記に云

今そは略す又段子十場河香三介は持りて乃其

公斜をいそはひのい銀子百枚は宗屋中納言

とてのい母は住まの河原まゝは借して住ま河原に
今の中門

江戸の通路は西門より一店屋町前は経て住ま河原へ今

乃三九のいしち本杉分屋へ太閤道へまゝのいしち

きも物に五へまゝも長右左を捕へ宗屋は

それ國中のいながり長河のい銀へ入用は河原へ

借後まへへ一各屋賃をいまゝへ高買は及まへ

しこの宗屋は借へまゝと謝へ一借せし其

は宗屋はいそは思はかりあり茶室の前へ

株の松あり物多ふ前夜雷より一應多一おまゝへ松

集りてそのいそは思はかりのいそはかり一松あり飛さぬ

其松はまゝのいそはかり一松あり一松あり年中のちん

小落木へ一今かへ一續風日記云十月晦日乃宗

屋のいそはかりまゝのいそはかり一松あり一松あり

一松あり一松あり今かへまゝのいそはかり一松あり



相輝元々能前中納言准后々同中納言秀新公致後
宣于相皇勝々之云云也此為皇統元日氏部少輔統
並如及主討決清正毛利修平少輔秀包成野輝基
長文中西掃律也打長お景能前も利吉も不四段
下少輔三司大谷刑下少輔去准後田右衛門尉長盛
杉浦三下少輔能信也之云云余の牧奉もろくもいふあ
らと夫より^{コナリヤタ}降^カ如水公長文公末之云云
かき心^カ柱^カのぬ福風の成あり一也如水公長文公

宅々 長文公の性永宗也宅二舎一と云ひ一と云
秀乃まごより地ゆゆゆ一良名下云

此の太閤良名下あり
能後國竹野郡もの一と云ふ吉田村吉成

村に三ヶ村内而るなり今更に捨地と云令
杖取と云記の金銀知り也

文福四 秀乃版判

十二月朔日

中納言秀俊は太閤の良名才大和太納言秀長はの娘

よこ此外は書物通あり又毛利輝之曰秀包曰秀元
成野長政本田正純柳原康政早小川隆系曰秀包
如水之長政之曰書年ありあり隆景の二書云

光一曰各一ト下云
此の二書云

物博多字化多先交多ト下ト少ト可也
所肝あり言室下ト多ト万通ト合ト可也
談今ト辰ト多トト多トのトトトトトト若
板屋竹尾辰九月正二の所河原屋二のトトト

援五口ゆト多言親教ト若ぬ法成トのトト
宗室中ト後河原屋ト多トトトト肝前トトト
多細言室中トトトトトトトトトトトトトト

二月正ト 隆景ト

言室ト

秀包の二書云

津内ト多先年ト 氏名トトト隆景ト後
トトトトトトトトトトトトトトトトトトト



長四年 秀秋 鳩

閏三月九日

博多 宗丹

如水公直書云

遙々消息と便冊殊宜淋瀝多信言一好
坊哉悦志一々國々多甲亦又与波拜能
多厚中々流自然下々様々多と相者々云
堅二の一々々一の々々々々々々々々々々々

存知々々々々々々々々々々々々々々々
七日日次々々々々々々々々々々々々々々

如水 是

十下々々々

宗高 是

示乃老公々々々々々々々々々々々々々々々

一 赤色を信交ありきまの 示乃頼公の良松 表は紅糸一々様々様々々

解々々 介後の中社一河産々々乃甲希六收五屏風一双 氏

よ此家後全屋下の門除下抄りて
也博多の物可し〜公後抄と字あり〜改む或曰
旨也〜同東側今の白木也。おぼしき
可判め〜時よ〜表は河間をぬりし今も
〜ぬらり〜き〜ははまの〜
〜東西〜は水の屋敷あり〜
長年中福岡の戦経家の時 長文の〜は
〜と〜又 長文の〜の日記なる

の言信接ニ郵到者今記するは先下
〜人〜る河邊あり水ありは
官人〜多〜海

十の日記長文抄

はの日記

昔信〜長文抄の河はまの〜
の形河乃田今〜博多の典長〜
〜宝暦年中〜



是の頃今直美國へ出立平蔵の婚にあり
こころ孫秋月のまゝ外戚のむね用ひてまはし
そらと本家の直美氏の今福園のまはす又宗為寺
田松原上田書林田中にて暮らしてまはしつゝ此の社
まはすを暮らしたるまはすのまはしつゝ越州佐倉の
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と

まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と
まはしつゝ直美氏の御住一匠にありつゝは楊玉女と



太閤様

とりの皮

三枚

海苔の皮

三枚

三枚

昆布

中一白紙五入

〇

三枚

三斗

三斗

とりの皮

拾遺三枚

上

秀乃様

とりの皮

三枚

三枚

海苔の皮

三枚

〇

三斗

三斗

とりの皮

三斗

三斗

とりの皮

三斗

三斗

とりの皮

三斗

三斗

三

政の痛

とす

とす

片うの様

とす

に斤

とす

と斤

中納言様

金うの皮

と牧と

とす

と

すの

拾連

とす

拾連

とす

とす

とす

とす

とす

とす

とす

とす

とす

とす

とす



へーあゝひ

十連

へーあゝひ

ひり

へーあゝひ

ひり

山口三番

丁

ひり

山口三番

へーあゝひ

ひり

杉原五郎

へーあゝひ

ひり

へーあゝひ

十連

へーあゝひ

ひり 十入

上品

右は其れは... 石原...

丁卯年... 杉原...

体は... 山口...

山口三番

山口三番

三月十日

山口三番

原通哲



次より至江戶は十月の夜に之に成りて今

一區を侍人令て之より矢川を其日此の事

は投交ありて世若見え及くし丸荒信り

を
中畧此のち取置置城攻のありて一區を原
より於て書名は後の又三年の戦いなり世より

其のち取置置 **石** 石を世若より人取て之に成り

城侍多て手又経練の石火矢取を換也

天下、弘の橋を侍言くと石構詔教多討創詔

少方教十乃一軍兵教る自人斬取り名令天

下関白依是石運成内之運七く方々を三人男之

奈月和睦く成月内以割る一詔回言き一

河等燒并亡國と成言一のイ便りく作之程

く山屋の事物表成体、成物格に於て務也

世修りこの成りたる其に二年の若くは到

深くは方情教存く古より倍々神屋寺と及

同くして成りたる中三つと及同毎つて及上橋寺と及

為井使成り及此外世若存るなりと方於て心也



状のしやゆゑにきりて奉りて今も厚く

しや右に新築し居る所のしや也

正月十八日

三つ石寺

拜進 雨天寺

東叔侍者禪所

内は長子長孫を有し其第一乳飛来は拜見

人形より通教年々若人令と平作今石

山物も亦尙一石肖也其のしや也今

万葉の関白殿の御子天皇前代も関白の例文

或二道にのみ物見の掃り波訪討、度、感、揚

宮り歌謡に於て銘戒の波打たりと云ふ

面目不憚るる方生儀と云ふに存人

一と云ふは尙し年未ユ又経緯も亦石大寺に在

丁格始る層天下詔り居る今對は其終

骨抄表當るる名人程と云ふに亦在

関白は不運に初禮は其及尙り此本丸

特1001
4

博多より抄きり又長行あり外藤三之原は孫

のりより若ありてきりて傳書のまのまの跡ありて

思田は年譜に實永十五年肥前佐原の一珍時記

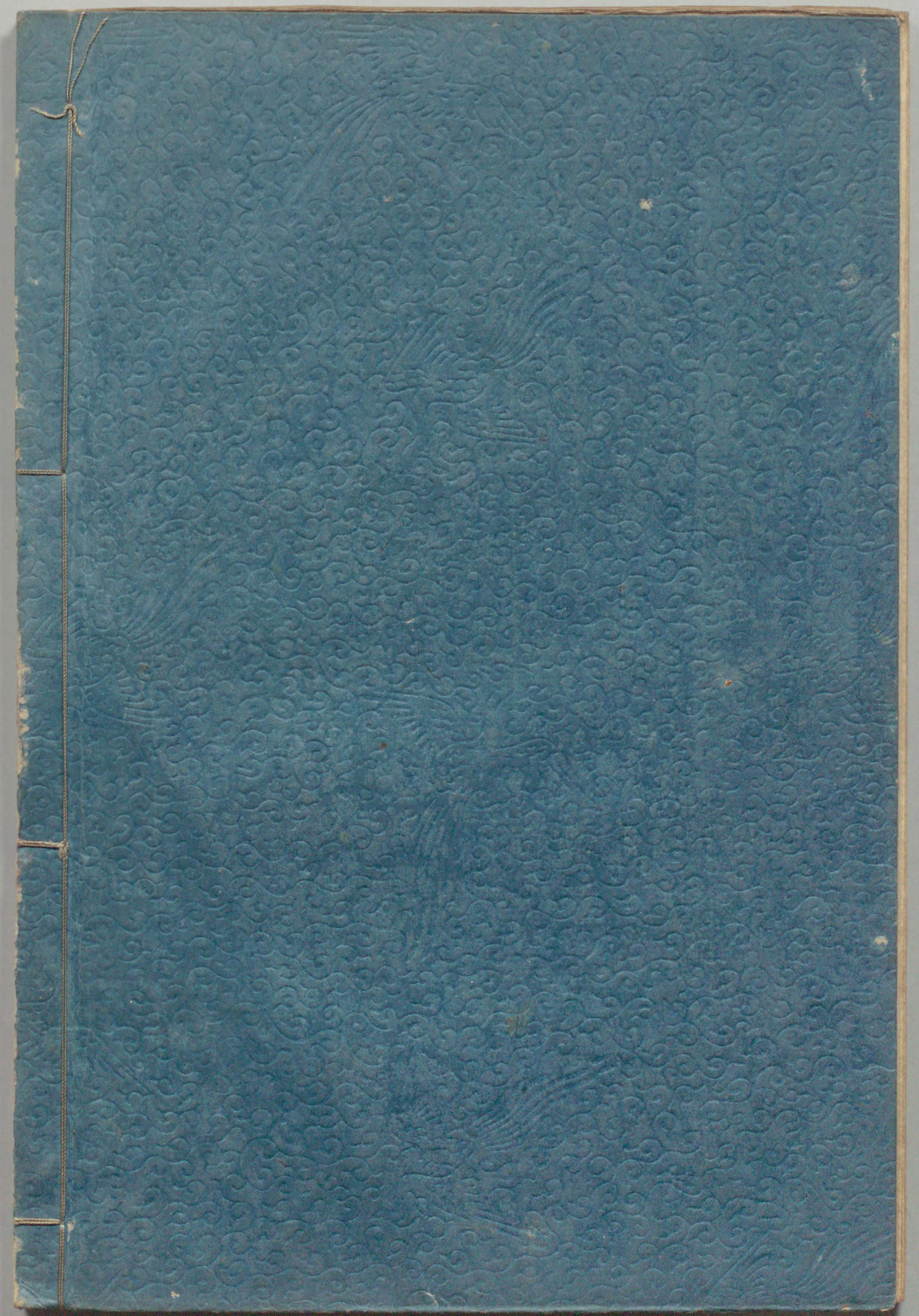
しめし 忠之と云ふ原とてしりて其のゆゑなり

秀平鏡が製をそのの毛利とて傳生故とて

しりて其のゆゑなり

石城志九終





国立国会図書館 石城志 12巻 特1001-4

ガラス使用